©2019 GUSHIKEN,Tohru

チャンス問題の出題割合（令和２年度試験受験用）

年度	チャンス問題の割合
平成31年度	32%
平成30年度	40%
平成29年度	48%
平成28年度	63%
平成27年度	56%
平成26年度	48%
平成25年度	48%
平成24年度	44%
平成23年度	48%
平成22年度	48%
平成21年度	44%
平成20年度	26%
平成19年度	45%
平成18年度	33%
平成17年度	45%
平成16年度	50%
平成15年度	24%
平成14年度	33%
平成13年度	42%

チャンス問題とは：
・毎年問題文も図表も答えの選択肢も全く同じ形で使いまわされている問題のことです。

平成31年度までの傾向：
・例年通り，本試験問題におけるチャンス問題の割合は約40%となっております。
（チャンス問題に全て正解できる状態で本試験に挑めば，それだけで約40%の得点を確保できます。）
従って，今後もチャンス問題による試験対策は有効です。
・例年通り，１年前に出題された問題と同じ問題は出題されません。
（このため平成31年度に出題された問題の答えを覚える必要はありません。）

※平成31年度の本試験の内容より，チャンス問題一覧を一部見直しました。

チャンス問題一覧（平成31年度試験受験用）

出題頻度	年度	問	備考
■	26	3	組織のプロセス資産に分類されるもの【→1】
■	26	3	プロジェクト憲章を作成する知識エリアとプロセス群【→3】
■	28	3	多くのプロジェクトライフサイクルに共通する特性【→6】
■■	31	15	プロジェクトスコープ記述書の説明【→9】
■	29	5	WBSの構成要素であるワークパッケージに関する記述【→9】
■	29	4	ローリングウェーブ計画法【→9】
■	19	20	予定日数で終了するための追加費用を最も少なくする場合に短縮すべき作業【→12】
■■	29	9	プロジェクトマネジメントにおけるクラッシングの例【→13】
■	29	1	クリティカルチェーン法の実施例【→13】
■■■	31	3	ガントチャートの特徴【→14】
■■■	30	7	作業配分モデルから読む，開発完了までの期間【→15】
■■■	27	11	ファンクションポイント法の一つであるIFPUG法で，機能を適切に分類したもの【→18】
■■■	31	9	工程別生産性から全体の生産性を表す式【→18】
■	19	22	ソフトウエアの開発規模と開発工数の関係を表すグラフ【→18】
■■■	28	10	開発コストの見積【→18】
■■■	30	8	COCOMOで見積る開発規模と開発生産性のグラフ【→18】
■	22	6	トレンドチャートで示す費用と進捗に関する状況説明【→19】
■■■	28	8	EVM(コストも超過せず，納期も遅れていない案件を選択)【→19】
■	29	12	EVMにおけるCPIが1.0を下回っていた場合の対処【→19】
■	24	9	ソフトウエア品質特性の説明【→22】
■	25	13	ソフトウエア品質特性における”保守性”の評価指標【→22】
■	23	8	ソフトウエア品質特性における”効率性”の説明【→22】
■■	21	1	コードインスペクションによる時間短縮【→23】
■	21	6	QC7つ道具(グラフの使い方)【→26】
■	20	30	QC7つ道具(図やチャートの使い方)【→26】
■	23	9	QC7つ道具(各商品の購入顧客数を示すのに向いたグラフ)【→26】
■■	30	4	RACIチャートで示す4種類の役割及び責任の組み合わせ【→29】
■■■	31	2	RACIチャートを用いた責任分担マトリクス【→29】
■	31	13	開発要員投入計画に基くPCレンタル費用の最低金額【→29】
■	23	4	アローダイアグラムから見る，必要な要員の推移【→31】
■	31	11	傾向分析の説明【→34】
■	21	7	個々の内容の軽重に注目して，展開順序を決める文章の構成法【→34】
■■	28	13	デルファイ法を利用したリスクの抽出【→38】
■	17	41	有識者の直感・推量を活用し，現在の動向から未来予測・分析する手法【→38】
■■■	30	11	定性的リスク分析で使われる手法【→38】
■■	26	20	システム改善案の定量的リスク評価【→38】
■■■	30	10	EMV(期待金額価値)を用いたツールの選定【→38】
■■	26	12	EMV(期待金額価値)の算出方法【→38】
■■	28	15	リスク対応戦略の適用【→39】
■	26	5	プロジェクトとステークホルダの関係【→47】
■	30	25	テンペスト技術の説明とその対策【→50】
■	31	24	AESにおける鍵長の条件【→50】
■	31	25	DNSSECの機能【→50】
■	20	27	システムを稼動させるために配置が必要な要員の最大数【→55】
■	17	37	災害による処理中断時間と再策費用，損失額と復旧時間のグラフ【→55】
■■	21	21	E-Rモデルを用いて全社のデータモデルを作成する手順【→57】
■	15	41	情報システムの全体計画立案時に業務をモデル化する目的【→57】
■	25	21	システムの非機能要件についての説明【→58】

出題頻度	年度	問	備考
■	24	16	テスト要求事項が定義されるアクティビティとテストの組合せ【→59】
■	23	17	階層化されたDFDの詳細化【→59】
■■	20	16	状態遷移図(担当者名，電話番号，数値のデータ入力処理)【→59】
■	17	15	ソフトウエア要件定義や分析・設計で用いられる技法【→59】
■	16	18	リアルタイム構造化分析技法に関する記述【→59】
■■	28	21	フェールソフトの考え方を適用したシステム設計【→59】
■	16	19	オブジェクト間の関係(is-a，part-of)の組合せ【→60】
■	22	17	クラス図におけるクラス間の説明【→60】
■	19	16	モジュール強度(結束性)が最も高いプログラム【→60】
■	20	14	モジュール分割技法の説明【→60】
■	19	18	ブラックボックステストにおいて，適切なテストケースの作成方法【→61】
■	19	19	エラー埋込み法による残存エラーの予測【→61】
■	17	13	RAD(Rapid Application Development)の特徴【→63】
■	30	18	リーンソフトウエア開発の説明【→63】
■	24	17	保守が必要となる開発モデル【→63】
■	28	19	XPのプラクティスの一つにとりいれられているもの【→63】
■	17	14	リバースエンジニアリングの説明【→63】
■	29	17	マッシュアップを利用してWebコンテンツを表示している適切な例【→63】
■	16	29	ソフトウエア開発・保守工程においてリポジトリを構築する理由【→63】
■	20	38	共通フレーム2007(SLCP-JCF 2007)の目的【→64】
■	28	18	CMMIの目的【→64】
■	17	25	プロセス成熟度が最も高い状態【→64】
■■	28	1	SPA(Software Process Assessment)の説明【→64】
■	21	23	プログラム著作権の原始的帰属【→65】
■	20	52	Webページの著作権に関する記述【→65】
■	23	24	ソフトウエア著作権の権利期間【→65】
■■	27	22	不正競争防止法で保護されるもの【→65】
■	30	22	労働基準法及び労働契約法が定める，就業規則に係る使用者の記述【→67】
■	19	54	労働者派遣契約関係が存在する関係【→67】
■	23	25	製造物責任法(PL法)上，製造物責任を問われるケース【→67】
■■■	25	24	個人情報保護で保護される個人情報の条件【→68】
■	30	23	基準値を超える有害物質を電気・電子機器に使用することを制限するために施行したもの【→68】
■	20	40	UCS-2(Unicode)の説明【→69】

※出題頻度の凡例　■：過去17年で2回出題　■■：過去17年で3回出題　■■■：過去17年で4回以上出題
※チャンス問題に関する注意：前年度出題されたチャンス問題は出題されません。平成31年度の受験では，上記から平成16～30年度のチャンス問題を選択し，ご利用下さい。